

## 卒業のとき

「卒業したい」その一心でここまで、走ってきた。いざ、ゴールが目の前に差し掛かったとき、なぜかふと立ち止まりたくなる。その裏にはきっと、「友情」とか「名残惜しさ」とか、永遠に消えることのないものがあるからだと思う。

論文を提出してから、5月25日に口頭試問、それからさらに論文に修正を加え、6月5日、論文の決定版と共に学位取得に必要な書類をすべて提出した。

スケジュール帳をめくってみると、ほんの一月前の出来事もすっかり忘れてしまっていることに気づく。振り返ると、実はとても幸せな日々を過ごしてきたのだ。5月11日、私は、将来の準備のために突然日本へ一時帰国することになった。街すれすれを通る飛行機の機体に揺られ、私はハラハラどきどき福岡空港にたどり着いた。一週間の日本滞在は私にとってとても幸せなひとときだった。日本にいる間、とくに博多駅で見るのも全て「買いたい」、「食べたい」という衝動に見舞われた。前回日本を離れてから10ヶ月ほど経つが、見るものすべてが新しく輝いて見えた。日本食も、スイーツも何もかも食べたくなった。自分を最大限甘やかし、買いたいものを買ひ、食べたいものを食べてしまった。

福岡からバスで鹿児島まで。日本にいる、一分一秒が嬉しかった。博多駅筑紫口を「ちく・むらさきぐち」と読んでしまったり、「すみません」というところを中国語で謝ってしまったり、小さなアクシデントは多々あったが、無事に鹿児島中央駅に到着し、今回の帰国を知らせていなかった父に電話をかけて、驚かせるというドッキリにも成功した。今回の帰国はあまりにも突然で、また鹿児島での滞在時間も少なすぎたため、多くの方々にお知らせすることもできなかった。鹿児島に荷物を置いて、鹿児島での用事を済ませると、また福岡にひらりと戻ってきた。

限られた日本滞在中、恩師と、夢を追いかける私を応援して下さる方々にお会いし、自分の将来とやりたいことについて確信を持って前に進む勇気を頂いたことは、私にとって大きな力となった。その力は、上海に戻ってからの私の生活を大きく変えた。努力し続け

なければならぬことを知り、努力は必ず夢へと繋がることを確信した。たった一週間の一時帰国は、私にとって格別な旅となった。

上海に戻ってくると、「相変わらず」の日々を送った。そんな「相変わらず」の日々は、実は毎日変わっており、同じ発見など一度もなかった。刻一刻と卒業に近づく日々。変わらないようで変わっている毎日を精一杯過ごすことが、いまの私に大切なことなのだと思う。

6月23日、復旦大学は2017年度卒業式を迎える。復旦に来て三年目の夏、私は卒業する。どれだけたくさんの人に支えられてここまで歩んでこれたのだろう。この場を借りて、心から感謝の気持ちを伝えたい。言葉では伝わり切れない感謝の気持ちを、言葉に載せて伝えたい。

2017年6月6日

復旦大学留学生寮1615室にて

